

令和6年度 学校評価表

品川区立鈴ヶ森小学校

校長 守屋 直孝

鈴ヶ森小学校・鈴ヶ森中学校校区教育協働委員会

委員長 庭野 正和

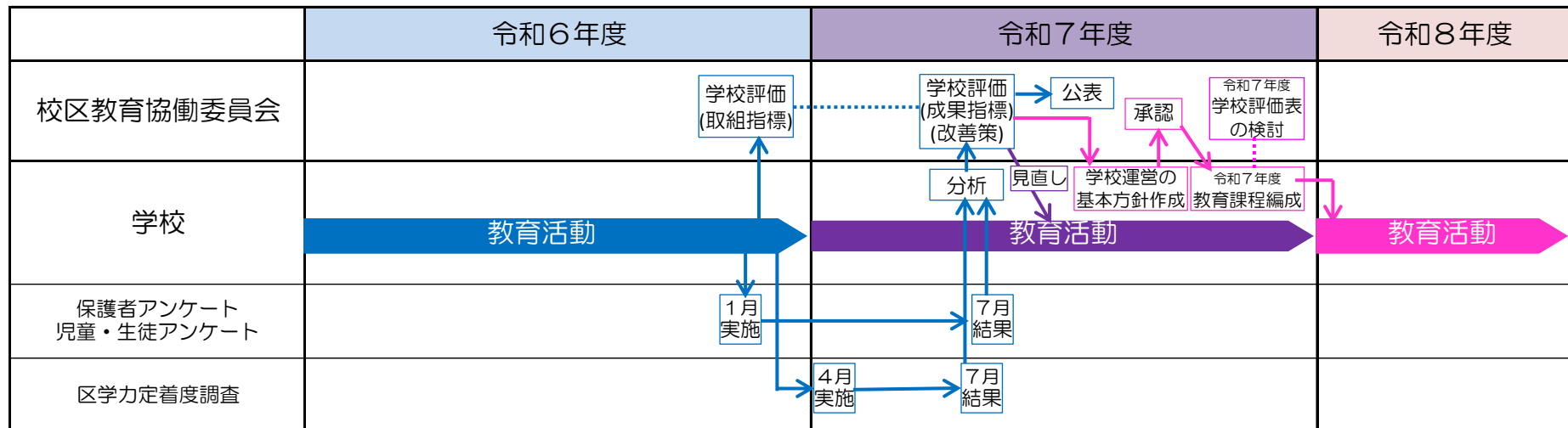
校区教育協働委員会は、品川区校区教育協働委員会設置要綱（改正 令和5年3月24日 教育長決定 要綱第5号）に基づき、次に掲げる事項について、学校評価を行っています。

- (1) 学力に関すること。
- (2) 人間性や社会性に関すること。
- (3) 体力・健康に関すること。
- (4) いじめ防止の取組に関すること。
- (5) 特色ある教育活動に関すること。
- (6) その他、学校運営に関すること。

学校評価を行う際、評価項目ごとに「成果指標」と「取組指標」を設定し、取組状況と取組によって表れた成果について把握しています。学校評価により浮き彫りになった学校の課題を委員会で共有し、改善策を考えました。

学校評価の結果を公表するとともに、今年度の取組の見直しや来年度の教育課程の編成に生かしていきます。

学校評価の流れ（※令和6年度の学校評価が令和7年度および令和8年度の教育活動につながる部分のみ表記しています。）



評価項目1 学力に関すること

重点目標		【学力に関すること】基礎・基本を徹底させ、思考力、判断力および表現力を育てる。 ・算数では、指導方法の改善として少人数による習熟度別学習を実施し、昼帯学習(15分×3)では、国語や算数のドリルを実施する。 ・区学力定着度調査の分析を組織的に行い、指導法を改善していく。 ・家庭学習の定着を図るため、毎日宿題を出し、音読カードを必須とする。 ・つまづきのある児童に特化した少人数個別指導をサマースクール、未来塾を実施する。 ・学力向上のための教員の指導力向上を目指す。		
評価指標	最上段:成果指標	最上段:成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降:取組指標	2段目以降:取組指標の達成状況の説明		
①	令和5年度実施の「区学力定着度調査」で、正答率の結果が区の平均を上回る。	教科によっては上がっているものもあれば、細かく見ていくと、区の平均を下回る教科(理科、社会)もあった。算数は平均値を毎年上回っており、引き続き維持できるようにしていく。	B	<ul style="list-style-type: none"> ・宿題やミニテストを細かく積み重ねて行い次年度につながるよう知識の定着を図る。 ・毎年4月に行われる学力定着度調査に向けて、前年度の2月から各教科復習に取りかかる。 ・社会:教科書が変わり、情報量が増えたので、課題を明確にして対策を練る必要がある ・理科:実験道具の使い方、単元ごとのミニテストなど細かく行い知識の定着を図る。 ・英語:中学校に向けて書くことが課題である。
	区学力定着度調査の分析を研究推進部が中心となって行い、指導法の工夫改善を図る。	学力定着度調査の結果をもとに、各学年で改善案を考え、指導法の工夫改善を共有することができた。漢字テストや言語指導など、全体で統一して改善を図っている。問題ごとに分析を各学年行い、どこが苦手なのか共有することができた。	A	
②	授業に対し大切に向かわせ、基本的な学習規律と習慣を身に付けさせる。	学習と生活スタンダードを用いて、どの教員も同じことを指導できるようにしている。学びへの意欲が低い児童がおり、起立が多少乱れる時がある。学習スタンダードに基づいて、普段から一貫した指導を行なっている。習慣化しているが、緩みが感じられる時期もある。生活スタンダードを中心として、児童ときまわりを確認しながら、学年内で統一したり、学校でも共通して行うことができた。挨拶・持ち物など、一貫したスタンダードがあることで、教員の指導も一律することができ、学年による指導のブレをなくすことができていく。	A	<ul style="list-style-type: none"> ・学習と生活スタンダードを継続し、全学級に基本的な学習規律を定着させていく。 ・児童が困っていることを明確にし、できる事を探し達成感を味わったり、動く動作を取り入れて気持ちを切り替えたりする工夫をする。 ・配膳の仕方や挨拶の仕方など、低/中/高で学年により生活スタンダードの内容が異なるため、各学年・各学級で每学期確認し、統一する必要がある。特に高学年では中学校と連携したスタンダードになっているため徹底できるようにする。 ・宿題はワンミニッツエクササイズ、音読、計算タイム、計算ドリル、漢字など紙での提出物が多くペーパーレス化になっていない。iPadでの宿題の使い方にもスタンダードがあると学年問わず一貫した指導がしやすくなる。 ・児童はiPadを想定以上に活用しているが、情報モラルの視点から意識してルールとマナーの正しい使い方を指導していく必要がある。
	生活スタンダードに示す学習のきまりを徹底し、全学年で共通した規律と習慣の指導を図る。	アンケートや作品の写真などを集めるのにとっても便利で、児童の考えを共有するツールとしてよく活用した。教員はバーコードによる宿題チェックなど授業以外でも活用した。iPadを遊べる道具と思っている児童が多く、文房具の一つとして授業でより多く活用したいが、iPadを正しく使えるようにすることが難しい。	B	
	iPadを文房具の一つとして考え、ペーパーレス化を図り、宿題提出方法の簡素化など有効活用していく。	授業前に振り返りを行ったり、指導助手の先生が入ったりして、指導を工夫している。放課後未来塾をはじめとして、児童の学力向上に向けた機会を保障できているので、未来塾を更に活用したい。児童や学年により、内容が大きく異なるので、指導者の力量も均一化していく。	A	
③	発展的指導および補習的指導を工夫し、児童の学力向上と学習機会を保障する。	習熟度別指導を行うことで児童の学びやすい進捗で学習を進めることができていく。講師の先生が子どもの特性に応じて細部にいたるまで指導している。理解が不足している児童にはじっくり見る時間を設け、得意な児童にはプリントを追加したくさんの問題に触れることで意欲的に取り組むことができた。	A	<ul style="list-style-type: none"> ・習熟度別に編制すると、人数に偏りが出る可能性があるため、人数を考慮した習熟度別指導を展開していく。 ・誰が指導しても同じ内容が学習できるよう、指導内容を共有、検討していく。 ・未来塾の参加児童は多いが固定化している。参加してほしい児童に興味をもってもらい利用児童を増やしていく。 ・サマースクールはつまづいたところから学べるので、基礎的な学力の安定を目指すのに必要であるため、継続していく。
	算数については全学年で習熟度別少人数指導を展開し、一人一人の習熟に合わせた個別指導の充実を図る。	サマースクール・未来塾を活用し学力の基礎の補助的な指導が実行できた。未来塾は宿題も見てもらえるので参加児童が多い。サマースクールは、一人一人を重点的に見ることができた。	A	
	年8回のサマースクール、年70回の未来塾を通して、子供の基礎・基本の定着を図る		A	

評価項目2 人間性や社会性に関すること

重点目標		【人間性や社会性に関すること】「思いやりの行動ができる人」を目標に、市民科学習、生活指導を計画的、組織的に推進する。 ・市民科学習で、年間指導計画に学校プラン、キャリア教育を取り入れ、自己有用感を高める指導を工夫する。 ・校内研究として、「学校の基盤を作る市民科学習～明日が楽しみ！鈴ヶ森！」をテーマに年8回の研究協議会と実践を行う。 ・「鈴小・中学校生活スタンダード」に基づき、授業中、学校での生活、給食中、家庭学習のきまりを徹底していく。 ・ハイパーQ-Uテストを活用して、児童の実態を知るとともに、児童学級内での満足度を上げる。 ・組織態勢で取り組むため、生活指導夕会、校内委員会、教育相談体制、管理職による授業観察を実施する。 ・アンケートへの取組等を組織化し、教育総合支援センターとの連携を強化し、いじめの早期発見と適切な対応を促進するため、教員研修、連絡会等を工夫する。 ・大井警察署、子ども家庭支援センター、HEARTS、教育相談機関、児童主任委員や児童センターなど関係機関との連携を促進する。		
評価指標	最上段：成果指標	最上段：成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降：取組指標	2段目以降：取組指標の達成状況の説明		
①	鈴小・中学校生活スタンダードにおける挨拶の仕方(語先後礼)を全クラスで実行・徹底する。	挨拶の仕方が統一(語先後礼)されていることで、児童も習慣として身に付けやすい。また、挨拶の大切さを伝え、礼儀をすることの良さを味わせている。	A	・コロナ禍でできていなかった上級生のお手本が、登校時の当番などで復活し、教職員の率先した指導もあり、生活スタンダードとして挨拶が習慣付いてきていると言える。 ・引き続き、挨拶を奨励していく。
	① 毎朝、教職員や高学年児童が校門に立ち率先して実行、浸透させる。	毎日、教職員と6年生が登校してくる児童へ挨拶をしており、多くの児童が自分から挨拶をすることもできている。特に6年生は下学年の児童のよい手本になっており、挨拶をする児童が多い理由の一つになっていて、学校全体の雰囲気を作っている。	A	
②	生活アンケートの「学校生活は楽しいですか」の肯定的回答を85%以上にする。	児童とのコミュニケーションを多く取り入れ、友達と関わることの楽しさを味わってもらえるように努力をしている先生が多い。いじめDアンケートやデイケンを通して学校生活への変化を細かく見てとれるようにしている。集団生活の基本、良さを実感させていきたいと考えている。	A	・アンケートの肯定的回答の割合も重要だが、各学年やクラスなどで回答内容に差がないか、差がある場合はなにか問題が隠れていないかなど、注視していく。
	② 学校風土調査を活用して、一回目(7月)の結果を分析し、二回目(12月)までに改善する	学校風土調査に代わり、2回目の調査が12月に行われるので、学年で共有し、学級の指導に生かしていきたい。	A	
	市民科学習(1,2年 年85回、3~6年 年140回)で、自己有用感を高める指導を工夫する。	ステップを意識して、授業展開をしているが、日常生活での実践をもっと増やしていきたい。また、年間指導計画に基づいて適切に実施されており、今後も学年で指導内容を話し合い、実践していきたい。	A	
③	要配慮児童について、教職員全員で共通理解を図り、組織で対応する。	年度はじめの児童について理解する会は非常に有効である。学期ごとに全体会、毎週の生活指導夕会で要配慮児童について共有を図っており、補教等で他学級の指導に接する場面でも生かされている。	A	・管理職を含めた学校内での共有、外部機関との連携など、組織としての対応が行われており、安心して児童を預けることができる体制になっている。 ・今後も特定の教職員に負荷が偏らないように、組織として対応を行っていく。
	③ 校内委員会を月1回開催し、配慮児童・学級に対するフォローや対策を全教職員へ周知徹底する。	定期的な共有があり、共通理解ができているが、会の進め方をきちんと固め、更によくしていきたい。	A	
	学校内での支援が難しいケースなどは、外部機関との連携を行うなど、継続的に支援を行う。	児相と連絡を取るなど外部機関と連携できている。また、校内委員会を中心として、窓口を共有しており、管理職も相談に入り、担任だけで悩まずに取り組んでいる。	A	

令和6年度 学校評価 品川区立鈴ヶ森小学校

評価項目3 体力・健康に関すること

重点目標		【体力向上・健康増進】「自ら心と体を磨く人」の育成を目標の1つに、全児童の体力の課題を把握し、指導形態、指導体制、指導計画を工夫して児童の健康増進・体力向上を図る。 ・「SHINAGAWAアティブライプロジェクト」を受け、「もりもりトライアル」(各学年月2回程度)、「ワンニツエクサイズ」(全校児童毎日)に取り組みさせる。 ・指導体制として、テクニカルアドバイザーを有効活用するため、TAオーダー書、TA活用の指導計画書を作成、事前の打ち合わせを充実させ、授業展開する。 ・「食育」に関して指導の全体計画を立て、市民科・生活科等と関連させたり、保健指導・給食指導で学校・地域との連携を図ったりする。		
評価指標	最上段:成果指標	最上段:成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降:取組指標	2段目以降:取組指標の達成状況の説明		
①	体力テストについて各学年の結果を経年で追い、当該学年の結果が全国平均を上回るようにする。	事前の指導や、結果の掲示が、児童の意識の向上にも役立っている。 どうしても下回る種目があるので、その力を補う運動を取り入れていく。	A	<ul style="list-style-type: none"> ・平均を下回る種目については、もりもりトライアルで扱ったり、体育の授業や帯時間で練習する事で運動に親しませていく。 ・握力は低学年で鉄棒やうんていなどの固定遊具を使い握る力を育てていく。 ・高学年になるにつれて曖昧になっていたり、毎日取り組む事を把握していない児童がいるので、周知していく。 ・運動をする児童としない児童の差が激しく、学校外での運動習慣を定着していけるように家庭に呼びかけ連携していく。 ・運動遊びを交えて体を動かすことに楽しさを感じさせるようにする。
	「ワンニツエクサイズ」について全校児童が年間200日以上取り組む。	皆勤賞は毎月300/630人前後で、継続的に取組を行っている児童は固定化している。取り組めていない児童には声掛けを通して200以上の取組を目指している。	B	
	もりトラを隔週程度で計画的に実施し、品川スポーツトライアルにする。	児童が体を動かしたり、体力づくりをする良いきっかけになっている。 記録を校内に掲示することで、達成感が味わえ、関心・意欲の向上につながっている。	A	
②	健康に関する意識を高め、よりよい生活習慣を身に付け、健康の維持増進を図る。	休み時間、校庭に出ない児童もいるが大半の児童は、校庭に出て外遊びをしている。	A	<ul style="list-style-type: none"> ・ほけんだより配布の際は児童と一緒に読み、基本的な生活習慣の確立を呼びかけていく。 ・給食室の映像は児童の食への関心や残さい率への意識が高まったので継続していく。 ・残さい率はメニューによって大きく左右されるため創意工夫が必要である。試食会やリクエストの多いメニューのレシピをアプリに掲示し、家庭と協力して児童の健康維持に努める。
	定期健診結果や学校保健委員会等に基づき、家庭への健康や基本的な生活習慣に関する啓発を積極的に行う。	年1回学校保健委員会を行った。 学校だより・ほけんだより等で実態に即した情報の発信をし、家庭への啓発を行った。	A	
	給食の残さい率7%以下を目指す。栄養士を中心に食育とSDGsの観点から教職員の意識を高め、指導体制を構築する。	栄養士が調理過程の動画や食材の産地クイズなどを作成し、各学級で給食時間に観賞し、食品ロスにならないように完食を目指す取り組みを行った。その結果、残さい率の平均は4.5%だった。	A	

5.0(十分達成できた) ⇔ 1.0(未達成)

評価項目4 いじめの防止の取組に関すること

重点目標		【いじめ防止の取組に関すること】児童が学校の仲間を大切に、健やかに成長し、自分自身のことが大切に思え、毎日楽しく学校が送れるようになるために、「いじめ防止基本方針」を策定している。 ・児童の育成方針：○市民科や各教科の学習を通してお互いを思いやり、尊重し、生命や人権を大切にできる児童を育成する。○「いじめは人間として許されない」と行動できる児童の育成をするために、全教職員が同じ姿勢で毅然と対応する。○「いじめは人間として許されない」という意識を保護者と協力して、常々話していく。 ・児童の取組：○異学年交流の推進。上級生が新入生の登校時の準備や学校生活の指導を行う。たてわり班活動を行い、人に思いやりをもって接する。○保小中連携。近隣保育園との合同学習体験を行う。近隣中学校と様々な交流活動を行う。 ・教職員の取組：○いじめ対策委員会 ○生活アンケート ○ふれあい月間(6、11月)の取組 ○校内研修 ○家庭・地域・関係機関との連携		
評価指標	最上段：成果指標	最上段：成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降：取組指標	2段目以降：取組指標の達成状況の説明		
①	いじめに起因する不登校および行き渋り児童数をゼロにする。	及達関係のトラブルに起因する不登校などはあるものの、いじめを奇異にするものは発生していない。教職員全体で意識して取り組んでおり、定期的な聞き取りやアンケートは、問題を小さいうちに解決していくことに役立っている。	A	・過去の事例を教訓に、鈴ヶ森中学校との連携が行われたことは非常に良い点であり、今後も継続して行っていく。
	鈴ヶ森小・中で共通の「学校いじめ防止基本方針」を作成し、鈴ヶ森校区として9年間を見通したいじめ防止策に取り組む。	今年度、中学校と引き継ぎを適切に行ったので、次年度以降も鈴鈴連携を生かしてきめ細かな引き継ぎを継続していきたい。	A	
②	いじめを未然に防止し、早期に対応する	小さなトラブルであっても、担任が一人で対応するのではなく、学年をはじめ、管理職も一緒に対応しているので、早期解決につながっている。また、アンケートやそれに伴う聞き取りは、未然に防止することに役立っている。	A	・トリプルチェンジのように児童自身がいじめについて考え、他人ごとではなく自分がその立場に立ったらどうするかを考えることは、非常に重要である。 ・今後も継続して実施いくとともに、保護者をさらに巻き込むような施策も検討する。 →いじめだけではなく家庭内の考え方も児童の考えに大きな影響を及ぼすため、他の家庭はどう考えるのか、など現在の家庭内で保護者と話しましょう、からもう一歩進んだ取組を検討する。
	報告・連絡・相談・確認を徹底すると共に、日常的な児童観察と各種アプリを活用し、児童の状況を見取り、情報を迅速に共有し、即対応する。	毎日の健康調査「デイケン」や「Nici」を使い、日常の児童観察を学校あんしんサポーターがチェックをし、担任と情報を共有できている。	A	
	市民科の授業でいじめに関する内容を学期に1回実施する。	地区公開講座を活用して適切に実施できている。定期的な指導は、当たり前のことであっても、確認をすることで児童の意識の定着に役立っている。トリプルチェンジを全学年で実施している。	A	
③	児童が主体的にいじめ問題と向き合い、いじめを許さない学校風土をつくる。	いじめDアンケートを実施するたびに、いじめについて、や・は・た行動などについて確認しており、その結果、良くないことは良くないと言える児童が多くなっている。学校全体として、教員が見守り、許さない風土を作ることにつながっている。	A	・よくないことを言えることは、児童の学校生活に対する安心感にも繋がるため、今後も継続して言える環境、学校風土の醸成を行っていく。
	児童委員会が中心となり、全校児童がいじめ問題について話し合い、スローガンをまとめ、いじめの未然防止に取り組む。	校内の掲示や動画など、児童の意識の定着に役立っている。スローガンの全体共有を全校朝会や集会ポスター掲示などで徹底できるようにしている。	A	
	市民科一貫プランのテーマ「ふれあい」に合わせ、計画的に実施する。家庭と連携を図り、家庭内のしつけやルールにも取り入れられるようにする。	学校での取組を家庭に情報共有することで連携をスムーズに図れるようにしている。	A	

評価項目5 (特色ある教育活動に関すること)

重点目標		【特色ある教育活動】 コミュニティ・スクールとして、校区教育協働委員会、学校支援地域本部を有機的に展開させ、地域未来塾、ドリームジョブ等、地域人材を大いに活用した学習活動、学校行事をすすめていく。		
評価指標	最上段: 成果指標	最上段: 成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降: 取組指標	2段目以降: 取組指標の達成状況の説明		
①	コミュニティ・スクールを活用して、地域と連携した教育活動を実践し、地域への愛着や児童の、社会性、自己有用感を醸成する。	保護者や地域の協力があることで、児童の安心や愛着につながっている。	A	<ul style="list-style-type: none"> ・保育園と連携し、新一年生対象にすまいるスクール体験やプレ授業、学習発表リハール見学などの交流ができています。 ・飼育委員会では動物病院の先生を講師に呼ぶなど、まち探検やコーディネーターによって地域と円滑に活動ができていますので継続していく。 ・そうてつローゼンなど新たな施設との交流や、3,4年生対象とした品川音頭のレクチャー、2年に1回の防災訓練など地域住民の意識を高め交流を深めていく。
	校区教育協働委員会を年6回開催し、地域人材を活用した施策を構築する。学校支援ボランティアとして図書ボランティアの方々に年11回の読み聞かせを実施する。	保護者ボランティアによる読み聞かせは、緊張感があり児童にも大変好評である。教員も児童と一緒に毎回楽しみながら聞いている。 ボランティアの取組は、周りの大人は教職員だけでなく多くの人がいることへの理解につながっている。	A	
	3学期にドリームジョブ学習を行い、6年生に将来の仕事に対する未来予想図を思い描かせる。	将来に向けての希望や夢をもてるように指導している。様々な職種のゲストティーチャーを呼ぶことができ、児童にとって多くの分野の職業を知る有意義な時間になっている。	A	
②	学校行事や委員会(年10回)、クラブ(年11回)、すずじタイム(たてわり班活動)(年7回)において、児童に主体的に取り組ませ、達成感や充実感を高める。	6年生を中心に運営することで良い経験となっている。委員会やクラブ、すずじタイムでは、6年生が中心となって、活動を考えたり進め、児童主体で活動することができた。	A	<ul style="list-style-type: none"> ・新たにすずじ掃除を取り入れた。担当や人数の割り振りも6年生が決め、全学年で掃除の仕方を統一することができた。 ・他学年との交流は、高学年の児童が主体となって取り組むことで達成感や充実感を高める場となり、その姿を見た低学年が憧れをもって活動することができるので、継続していく。 ・教員は児童が主体的に取り組めるように時間がかかっても待つ姿勢を大事にする。
	児童が自ら計画を立てて取り組む機会を意図的に毎回設定することで、主体的に取り組ませ、教員が適切に指導・助言する。	教員が意図的、計画的に取り組むことで、児童が主体的に活動できるよう工夫し、主体性が育まれている。	A	

5.0(十分達成できた) ⇔ 1.0(未達成)

評価項目6 (その他、学校運営に関すること)

重点目標		【その他、学校運営に関すること】将来我が国の各分野で必要となる人材を意図的・計画的に育成する上で、学校内の教育活動だけでなく、家庭・地域との連携は欠かすことができない。 ・各種会議、便り、ホームページ、PTA活動、保護者参加行事などを活用して、学校・家庭・地域の連携を推進する。学校公開、HP・各種たよりで教育活動の広報活動を行う。 ・家庭訪問・個人面談等による家庭との共通理解や連携を図る。特に、食物アレルギー対応を慎重に実施する。 ・毎月の安全点検を実施し、安全で安心感を与える環境をつくる。修理・修繕については、危険性、緊急性等を考慮し、迅速な対応を徹底する。全国交通安全運動期間等に教員が交替で登校を見守る。 ・特別支援教室拠点校の特性を生かし、訪問指導教員が配慮が必要な児童に適宜関わっていく。		
評価指標	最上段: 成果指標	最上段: 成果指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
	2段目以降: 取組指標	2段目以降: 取組指標の達成状況の説明		
①	区の保護者アンケートで、「現在通っている学校に満足している。」の問いに、肯定的評価の割合が前年度を上回る。	「現在通っている学校に満足している。」の問いに対して肯定的評価が前年度を3.2ポイント下上回る89.8%だった。	B	・学校行事などについてこまめなメール配信、Webへの掲載など、学校からの発信がよく行われており、今後も継続して取り組んでいく。
	学校だより・学年だより、掲示板・回覧板、Web等を活用して、学校の様子や学校の考えを発信する。	することで、保健情報や学校からの伝達事項を伝えることができる。また、Webページを頻繁に更新することで、アクセス数が毎月1000件以上になっており、関心が高まっていると感じている。	A	・反面、PTAによる広報誌が配布されなくなったことは今後の課題である。 ・校舎改修が行われる中で、これまでと違う安全管理が求められることになるが、引き続き児童が安全に過ごせる環境の整備を行っていく。
	児童作品等の掲示、毎日の施設内の行き届いた清掃、遊具や施設の安全点検(月1回)に重点をおいた学校環境整備に努める。	児童作品の廊下掲示は、定期的に変えたり、行事や学習したことを意識して掲示している。毎月の安全点検を実施することで、破損や故障箇所を確認できている。主事さんが廊下や階段を一日に何度も掃除してくださっている。	A	

5.0(十分達成できた) ⇔ 1.0(未達成)